

一 ハルシナイから上流の地名⑥一

前回は、ハルシナイから上流の最難所である掲載地図のレー^レコロ^コブ^イラ(re-kor-puyra)名前・を持つ・激流→「有名な激流」の意味)を紹介した。安政四年(一八五七年)、松浦武四郎は「再^さ篙^こ石狩日誌」で、このレー^コロ^コブ^イラから四丁(約四三六m)上流に、掲載地図の伝説の大岩のトウレ^トサラニ^ナプ才オウバユリの鱗茎・一を入れた一手さげ籠)があると記録している。

トウレ^トサラニ^ナプは、カムイコタンのニッネカムイ(nitnekamuy)鬼神・魔神)伝説では、石狩川最上流の伝説の大岩である。既に、当連載⁶⁸、⁶⁹で紹介したが、その時は地図上の位置を明示できなかつたこともあり、ここで改めて説明をさせていただく。また、

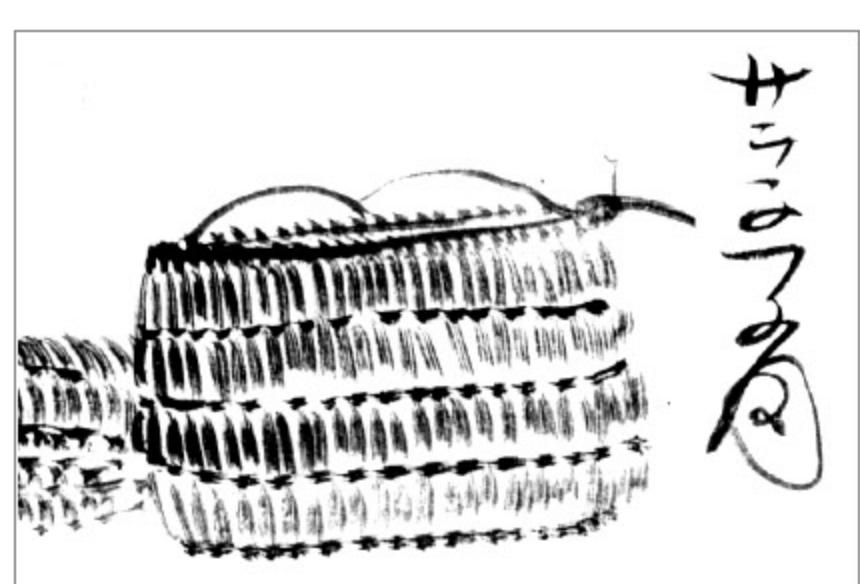
魔神)伝説では、石狩川最上流の伝説の大岩である。既に、当連載⁶⁸、⁶⁹で紹介したが、その時は地図上の位置を明示できなかつたこともあり、ここで改めて説明をさせていただく。また、

この大岩の四丁下流にレー^レコロ^コブ^イラがあつたとのことで、次回にかけてその位置を検証したい。

写真①が、トウレ^トサラニ^ナプの伝説の大岩で、掲載地図のように、石狩川の左岸の岸近くにある。松浦武四郎は、トウレ^トサラニ^ナプは、ニッネカムイ(松浦の表記はニイツイカモイ)が、落命する時に捨てたサラニ^ナプ(手さげ籠)で、それが岩と化したものと聞き、「再^さ篙^こ石狩日誌」に次のように伝説を書きとどめた。

「トレツフサラ子フ—大岩—ツ右(註一上流に向かつて右=左岸)の川岸に突出す。トレフは則^{すなわち}、舊妻葉貞母、松前方言ウバユリと云。京都辺の山にてはガワユリ、また一名鹿かくれ百合と云もの也。夷言(註—アイヌ語)是をトレフと云、山中の婆爺の喰料に大低^{ママ}是を當^あるもの也。むかし其トレフをサラ子フと云ものに入れて、此處まで二

写真①の大岩は、武四郎が描いた**写真②**の「サラ子フ(手さげ籠)の図」に似ていて、実はこれはニイツイカモイ(nitnekamuy)鬼神)が、捨てたものが、石と化したものだという。



②「サラ子フの図」

①トウレ^トサラニ^ナプ

イツイカモイ持ち來り、此処にて命終りて捨てたるが石に化せしと云處也。サラ子^子は次に図する如し(写

真②)。アイヌ等山に行く

または川に行く時、喰料其外の具等を入れて持ち行くもの也。本邦

にてコダシ

(註—小出し)・ラゴ(註—畚)等云もの也。榎皮(註—榎の木の皮で作った糸)にて編みて用ゆ。)

昭和六年発行の近江正一著『伝説の旭川及其附近』では、松浦武四郎の記録と同様の伝説が、簡潔に記述されているので、最後の部分のみ紹介する。

「…そしてニチエネカムイの首は岩となり、ニチエネシヤバ(鬼の首)となり、胴体は立岩ニチエネとなり、持つてゐたラゴ(籠)は化石となつてドレツ^トサルネツ^ト普^トとなつた。ドレツ^トサルネツ^ト普^トはうば百合、サルネツ^ト普^トはラゴの意である。」

を口外することは禁忌、タブーであったと明らかにしたのは、当時のアイヌの人たちの慣習を知る上で、貴重な記録となっている。

「トレフサラ子^子フ」と云は、彼鬼神の携へ居たりし舊妻葉貞母(トレフ)—和名鹿かくれ百合といふ—を入れし籠(サラ子^子フ)の化石なりと。惣^{そうじ}て此鬼神には種種の縁故も有りしが、アイヌ等他に語ることを禁ぜりとかや。」

さて、右のような重要な伝説の大岩であるが、明治二十三年にこの地を調査した永田方正の『北海道蝦夷語地名解』には、全く記述がなく、脱落している。

「…そしてニチエネカムイの首は岩となり、ニチエネシヤバ(鬼の首)となり、胴体は立岩ニチエネとなり、持つてゐたラゴ(籠)は化石となつてドレツ^トサルネツ^ト普^トとなつた。ドレツ^トサルネツ^ト普^トはうば百合、サルネツ^ト普^トはラゴの意である。」

次回は、トウレ^トサラニ^ナプの異説の紹介と、レー^レコロ^コブ^イラの位置の検証をする。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第1週号に掲載します

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

96
高橋 基